

Pramāṇavārttika III 192-193 について

護 山 真 也

はじめに

ダルマキールティの *Pramāṇavārttika* (PV) III は、1938 年に R. Sāṅkṛtyāyana が PV の梵本を校訂出版して以来、戸崎宏正博士の『仏教認識論の研究』（大東出版社、1979, 1985 年）にいたるまで多くの研究が積み重ねられてきた。その結果、PV III の思想内容の解明は進んだものの、テキストの批判的校訂という観点からは、一次資料となる PV ならびに PV 注釈文献の写本へのアクセスが閉ざされていたために、未だ不明瞭な個所を残したままであった。しかし、この研究状況は、近年、大きな転機を迎えつつある。渡邊重朗博士による PV 注釈文献写本の facsimile edition の出版（1998 年）、E. Steinkellner, H. Krasser, H. Lasic 博士によるジネーンドラブッディの *Pramāṇasamuccayaṭīkā* (PST) の校訂テキスト出版（Beijing-Vienna, 2005 年）、E. Steinkellner 博士による *Pramāṇavinīścaya* I, II の校訂テキスト出版（2007 年）により、PV III の批判的校訂を可能にする状況が整った。すなわち、これらの新資料を用いることで、従来不明瞭な解釈にとどまっていた PV III の幾つかの詩節を再校訂・再解釈する道が開けたのである。本稿は、その一例として、PV III 192-193 を取り上げ、これらの詩節の従来の読みを訂正し、その解釈ならびに思想史上の意義について、若干の考察を加えることにしたい。

1. 従来の PV III 192-193 解釈の問題点

ここで問題とする PV III 192-193 は、戸崎博士による科段では、「I. 量の数」、「II. 現量の定義」に続く「III. 現量の名称」という箇所属す。知覚は対象 (*viṣaya*) と感覚器官 (*akṣa*) の両者に依拠して生じるにも関わらず、それはなぜ *pratyakṣa* とだけ呼ばれ、*prativīṣaya* と呼ばれないのか。ディグナーガの *Pramāṇasamuccaya* (PS) I 4ab ならびに同詩節への *Vṛtti* で論じられる内容を注釈して、ダルマキールティは次のように述べる。まず戸崎博士が採用した読みと翻訳を提示する。

sākṣāc cet jñānajanane samartho viṣayo 'kṣavat |
 atha kasmād dvayādhījanma tat tena nocyate || (191)

もし対象が感官と同様に直接的に知を生ぜしめる能力をもつならば、なぜ両者に依存して生じるそれ (= 知) がそれ (= 対象) によって名づけられないのか (と問うならば),
 samīkṣya gamakatvaṃ hi vyapadeśo niyujyate |

tac cākṣavyapadeśe 'sti taddharmaś ca niyojyatām || (192)

およそ名称は、(それが所詮の対象を) 知らしめるものであることを考慮して定められる。(いま現量の名称については、) 感官 (という語を含んだ) 名称 (すなわち pratyakṣa) には、それ (= 知らしめるものであること) がある。またそれ (= 知らしめるものであること) (によって遍充される) 法が (名称に) 使われるべきである。

tato līngasvabhāvo 'tra vyapadeśe niyojyatām |
 nivarttate vyāpakasya svabhāvasya nivṛttitah || (193)

それゆえに、この場合の名称には、「(現量を知らしめるものであること) の所遍」自性である証相が使用されるべきである。「(対象)」という語を使用することは) 否定される。なぜならば能遍自性 (すなわち「現量を知らしめるものであること」) を否定するから。

ここでは、〈知らしめるものであること〉(gamakatva) とそれによって遍充される法 (dharma) との間にある遍充関係を根拠として、「知覚」を表示するためには akṣa という語を含む語が使用されるべきであることが述べられている。だが、その〈知らしめるものであること〉によって遍充される法とは何かは不明である。戸崎博士は解説において、「所詮の対象を知らしめる何らかの法 (dharma)」とは、現量の名称の場合には、「所詮の対象である現量を他の知——「他相続の識」や「意識」——と区別して知らしめる法、つまり akṣa (感官) という語」であると理解されているが、akṣa という語が pratyakṣa という語の dharma であるとはどういうことだろうか。また、いかに PV が省略を含む文体で書かれているとはいえ、原文だけからは想定困難な補足をこれだけ多数認めるべきなのだろうか。

2. PV III 192-193 のテキスト訂正

このような疑問から、周辺資料を確認してみると、ジネーンドラブッディの注釈に、この箇所に対応する以下の議論を見出しうる。

PST 40.5-9: ayam atrābhiprāyaḥ, lokena hy asya śabdasyāsminn abhidheye pratyāyanasāmarthyam astīti gamakatvaṃ abhisamīkṣya śabdaḥ prayujyate. tac ca gamakatvaṃ indriyavijñāne 'kṣavyapadeśasyāsti na viṣayavyapadeśasya, gamakatvena ca śabdaniyogārhatā vyāptā. atas tad gamakatvaṃ viṣayavyapadeśān nivartamānaṃ tanniyogārhatām api nivartayati, ato na viṣayair vyapadiśyata iti.

以下のことがここ (= PSV on 1.4ab) では意図されている。実に、世間の人々は「この

語にはこの表示対象を知らせる能力がある」と(その語の)〈知らせるものであること〉(gamakatva)を考察して、語を使用する。そして、その〈知らせるものであること〉は、感官知に関しては、akṣa という名称にあって、viśaya という名称にはない。そして〈知らせるものであること〉によって〈語の使用可能性〉は遍充されている。したがって、viśaya という名称から否定されているその〈知らせるものであること〉は、その(語の)使用可能性も否定する。したがって、viśaya によって(知覚は)表示されない。

このジネーンドラブッディの文章は、校訂者が注記するように PV III 192ab からの改変を含む引用と 193 との並行表現を含んでおり、全体として PV III 191-193 を下敷きとして書かれている。この文章を先に見た PV III 191-193 と比べてまず気付くことは、PV において不明であった gamakatva によって遍充される対象が、PST において śabdaniyogārhatā として明示されていることである。遍充関係が明確である分、PST の議論は PV のそれよりもはるかにわかり易い。では、ジネーンドラブッディは何を典拠として śabdaniyogārhatā という遍充対象を記したのか。

そこで、もう一度 PV の二つの詩節を眺めると、そこに二度に渡って niyojyātām という動詞——この存在こそが二つの詩節の理解を困難にしている元凶であるのだが——が登場していることに気付く。この二つの動詞が登場する箇所、マノーラタナンディンの注釈は次のようになっている¹⁾。

PVV (ad PV III 192d) 176.11 (=PVV_{Ms} 34b2): tasya gamakatvasya vyāpakasya dharmo vyāpyabhūto niyojyātā (Ms.: niyojyātām ed.)²⁾

PVV (ad PV III 193ab) 176.14f. (=PVV_{Ms} 34b2): tato vyāpakābhāvāt vyapadeśe dharminī atra gamakatve sādhye niyojyātā (Ms.: niyojyātām ed.) liṅgam.

ここで、写本に反して校訂者が anusvāra を加えていることが分かる。おそらくは Sāṅkṛtyāyana は 1938 年に出版した PV 校訂本の読みに従って、意図的にこの加筆を行ったものと思われる。では PV 写本の本来の読みはどうだったのか。一つの手がかりはプラジュニャーカラグプタの注釈に含まれる PV の読みであるが、写本を確認すると、やはりそこでも anusvāra はない³⁾。そして、Sāṅkṛtyāyana が PV 校訂で基本資料とした Hemarāja Śarman 寄贈の貝葉写本 (PH) は、この箇所を含んでいなかったものと推測される⁴⁾。したがって、残された可能性は、シャル寺で発見された貝葉写本 (PS) に基づいて anusvāra を含む読みが採用されたというシナリオか、あるいは単純な誤記か、のいずれかである。いずれにせよ、ここでこれらの資料を総合するならば、PV III 192-193 は次のように読まれるべきである。

samīkṣya gamakatvaṃ hi vyapadeśo niyuḥyate |

tac cākṣavyapadeśe 'sti taddharmaś ca niyojyātā || (192)

実に、名称は、〈(その表示対象を) 知らしめるものであること〉を考慮して使用される。そして、感覚器官による名称 (= “pratyakṣa”) にはそれ (= 〈知らしめるものであること〉) がある。そして、それ (= 〈知らしめるものであること〉) によって (遍充される) 属性⁵⁾ が〈使用可能性〉である。

tato līṅgasvabhāvo 'tra vyapadeśe niyojyātā |

nivarttate vyāpakasya svabhāvasya nivṛttitah || (193)

それゆえに、この (“prativīṣaya” という) 名称に関して、〈使用可能性〉という証因である本性は⁶⁾、能遍である本性 (= 〈知らしめるものであること〉) の否定に基づいて否定される。

3. PV III 192-193 の推論式が意味するもの

このように niyojyātā の読みを採用することで、二つの詩節は、先に見たジネーンドラブッディの記述と同様に、niyojyātā と gamakatva との遍充関係に関する議論、すなわち、ダルマキールティの術語を用いるならば vyāpakānupalabdhi を援用した議論として理解できる。NB II 33 で説かれる vyāpakānupalabdhi に基づく推論式を参考にしながら、PV III 192-193 の論理構造をまとめるならば次のようになる。

svabhāvahetu に基づく推論式			vyāpakānupalabdhi に基づく推論式		
pakṣa	ayam	ayam vyapadeśa	pakṣa	atra	atra vyapadeśe
sādhya	vṛkṣa	gamakatva	sādhya	śiṃśapābhāva	niyojyātābhāva
sādhana (līṅga)	śiṃśapātva	niyojyātā	sādhana	vṛkṣābhāva	gamakatvābhāva

以上で二つの詩節が説く推論式の構造は明かであるが、その意味するところを理解するためには、この個所が注釈する PS I 4ab と *Vṛtti* の議論を確認しておく必要がある⁷⁾。その個所で、ディグナーガは「知覚」を prativīṣaya という名称ではなく、pratyakṣa の名称で表示するのは、akṣa という語が〈概念を離れたもの〉たる知覚に特有な要素 (asādhāraṇahetu) だからである、と述べた⁸⁾。つまり、viṣaya は意識 (manovijñāna) など他の概念知と共通するが、akṣa は共通しないため、語源分析からも、知覚 (厳密には感官知) の非概念知性が導かれる。これに対して、ダルマキールティが述べるのは、「〈対象を理解させるものであること〉 (gamakatva) をもつ語が使用されるべきである」という語の使用に関する原則の確認にすぎない。換言するならば、ディグナーガにおいて語源分析の問題であったものが、ダ

ルマキールティにおいては言語使用の問題にすり替えられたということである。その結果, *pratyakṣa* という語から, 非概念知性という知覚の特質を立証しようとしたディグナーガ説は, PV III 192-193 では捨象される。なぜダルマキールティはディグナーガ説を踏襲しなかったのか。

詳細は別稿を期すが, 筆者はこの点について, ダルマキールティの同時代人クマーリラの議論からの影響があったものと推測する⁹⁾。クマーリラは, ŚV *pratyakṣa* 120-139 において, 概念を伴う知覚 (*savikalpakapratyakṣa*) もまた知覚であることを種々の点から論じている。そのうち, 次の三点は PS I 4ab のディグナーガ説に対する批判として解釈し得る¹⁰⁾。(1) 概念を伴う知覚は間接的であれ, 感覚器官との結合関係に依拠しているので, *pratyakṣa* と呼ばれる。感覚器官は概念を伴わない知覚だけに固有の原因なのではない。(2) 世間の慣習的用法として *pratyakṣa* という語は概念を伴う知覚も意味することが知られている。学者たちですら世間で周知の事柄に随順するのであり, 周知の事柄を定義によって変更することはできない。(3) *pratyakṣa* という語の語源から知覚の非概念知性を述べることはできない。概念知の自己認識 (PS I.1.7ab) の場合, 五種類の感覚器官は機能していないので, 意 (*manas*) を感覚器官として認めるとすれば, 概念を伴う知覚を認める者たちにも都合がよい。

このいずれの点も, ディグナーガの PS I 4ab に対する有効な批判であり, ダルマキールティはこの点に関して決定的な応答を見出しえなかったのではないかと思われる。PV III 192-193 に説かれる二つの推論式は, 「知覚」を理解させるために *pratyakṣa* という語が現に使用され, *prativīṣaya* という語は使用されていないことを述べたにすぎず, 理解されるべき「知覚」の内実には踏み込んではいない。ダルマキールティは, *pratyakṣa* の語源分析に関してクマーリラとの直接対決を回避した上で, 仏教徒が認める「知覚の非概念知性」について, それは「知覚のみによって証明される」(PV III 123ab) という立場を取る。このような思想史的背景を考慮するならば, PV III 192-193 の意図は, 理論的難点を抱える PS I 4ab のディグナーガ説を実質的に無効化することにあったと言えるのではないだろうか。

* 本稿は, 2006 年冬学期にウィーン大学で開講された John Taber 教授によるゼミナールでの発表原稿を元としている。有益なコメントを頂いた同教授に心より感謝する。

1) 使用テキストは, PVV: R. Sāṅkṛtyāyana (ed.), *Dharmakīrti's Pramāṇavārttika with a commentary by Manorathanandin, Appendix to Journal of Bihar and Orissa Research Society* 24-26, Patna 1938-1940; PVV_{Ms}: S. Watanabe (ed.), *A Sanskrit Manuscript of Manorathanandin's Pra-*

māṇavārttikavṛttiḥ, Facsimile Edition, Patna - Narita 1998.

- 2) tā の文字上にある欄外注を指示する印が *anusvāra* と見間違えられた可能性もある。
- 3) S. Watanabe (ed.), *Sanskrit Manuscripts of Prajñākaragupta's Pramāṇavārttikabhāṣyam*, Facsimile Edition, Patna - Narita 1998, fol. 139b5, 140a2.
- 4) R. Sāṅkṛtyāyana 校訂による PV (Appendix to *Journal of Bihar and Orissa Research Society* 24, Patna 1938) の序文から, PH 写本は多数の欠落を含み, かつ 10 葉程が欠けていることが知られる。PV III に関して PV 校訂本では欄外に 24a から始まる番号に混じって, 16b から始まる番号が振られている箇所がある。B. Kellner 博士とのプロジェクトにおいて, PH 写本に同定されうる, G. Tucci collection の写本のデジタルコピー (Francesco Sferra 博士から Kellner 博士が受領したもの) との部分的比較により, 24a からの番号の箇所が PH 写本に基づく箇所であろうと推定された。PV III 191-193 は 17a の番号が振られた箇所に属するので, PH 写本欠落箇所であろうと推測される。
- 5) *taddharma* の解釈は **Pramāṇavārttikapañjikā* (PVP), D. 4217, fol. 189a2f. = P. 5717, fol. 220a6f. ならびに PVV 176.11 に基づく。
- 6) Cf. PVP D. 189a3 = P. 220a8f.: *go bar byed pa'i rang bzhin rtags ni nges par sbyar | rang bzhin zhes bya ba'i rtags nges par sbyar ba di (di D : de P) ldog bar 'gyur ro ||*
- 7) シャーキャブッディは二つの推論式を PSV ad PS I 4ab で言及される「太鼓の音」「大麦の芽」を実例とした推論式にする。戸崎『仏教認識論の研究 (上)』, p. 292f., fn. 6.
- 8) Cf. M. Hattori, *Dignāga, On Perception*, p. 25f. この箇所が *Abhidharmakośabhāṣya* (ad *Abhidharmakośa* I 45cd) を下敷きとすることは, 同上 p. 86, n. 1.31 を参照。
- 9) プラジュニャーカラグプタは PV III 193 の注釈において, *Ślokavārttika*, *pratyakṣa* 132ab, 138cd を改変した詩節を反論として提示する。Cf. R. Sāṅkṛtyāyana (ed.), *Pramāṇavārttikabhāṣyam or Vārttikālaṅkāra of Prajñākaragupta*, p. 278.33.
- 10) Cf. *Ślokavārttika*, *pratyakṣa* 120-139, in J. Taber, *A Hindu Critique of Buddhist Epistemology*, p. 156f. 同箇所の翻訳ならびに解説は, 同上 pp. 96-105 ならびに戸崎宏正「クマーリラ著『シュローカヴァールティカ』第4章(知覚スートラ)和訳(4)」『印度哲学仏教学』第6号, pp. 75-90 を参照。

〈キーワード〉 ダルマキールティ, *Pramāṇavārttika*, 知覚

(ウィーン大学研究員, Ph. D.)